

## レギュラトリーサイエンス学会開催される

企画調整主幹付 宮原 誠

9 月 2 日と 3 日、東京千代田区にある学術総合センターにおいて、第 2 回レギュラトリーサイエンス (RS) 学会学術大会が「RS の実践と活用」というテーマのもとで開催され、延べ 532 人が参加した。大会長の 大野泰雄 所長は冒頭の会長講演で、“RS の発展と活用のためには多くの人の協力が必要”と強調した。その後、川西徹副所長が座長となり、特別講演が行われた。また、当所の研究者が座長を務めるシンポジウムが 3 件開催されたほか、ポスター発表として当所の研究成果が数件報告された。



RS 学会で講演中の大野所長

東京一橋会館で 2012 年撮影

9 月 2 日、にわか雨が断続する中、事前登録と当日受付併せて 500 人以上の参加者で、一橋講堂はほぼ満席となった。

大野大会長は会長講演において“災害が起きた場合の被害を最小限に留めるためにも、RS 研究の振興と人材の育成や研究者の意識改革などを基礎にした社会との交流が有益”との考え方を示した。さらに、“RS の実践と活用”というテーマの下に、その実践例を紹介し、RS の定着と発展と活用には多くの人々の努力と協力が必要であるとの考え方を述べた。その具体例として、当所の研究者が中心となり、産官の協力により医薬品等の絶対純度決定に必要な分析法(定量 NMR 法)

が実用化されたことや、欧米の産学官の協力で不確実係数や TTC (threshold of toxicological concern) が導入され、農薬や香料などの安全性評価が可能となった事などが紹介された。続いて RS 学会の運営委員会委員長 川西徹副所長が座長となり、臨床医学、製薬工業界及び哲学の立場から、3 題の特別講演が行われた。

また、11 のシンポジウムが開催され、そのうち次の 3 つのシンポジウムを大学の研究者と協力して当所の研究者が主宰した。“薬物性心毒性への新たなアプローチ”、“ファーマコゲノミクスを医薬品開発および市販後安全対策に役立てるには”、“経済産業省・厚生労働省連携事業「次世代医療機器開発ガイドライン・評価指標作成事業」の 7 年間を振り返って”。

なお、「Radical uncertainty と Public Dialogue～有効性と副作用の相克を超えて」というシンポジウムが薬害被害者や人文科学分野の講師を中心に開催された。その他、2 日に口頭並びに 3 日にポスターなど、新しい研究成果の発表があり、活発な論議が行われた。